

第3回「子母澤寛文学賞」(短編小説部門)【大賞】

「秀吉と新左衛門」 東京都 牧子 嘉丸

1

慶長三年の暮春、豊太閤秀吉は伏見城大広間の首席に座していた。

宵より始められた宴も酒礼・饗膳とすすみ、酒宴となって杯の応酬でしばしにぎやいでいたが、深更ようやく果てようとしていた。

酔いしれた話し声も次第に静まり、それまでのざわめきが潮のひくように消えると、一同の胸中には言いしれぬ不安がこみあげてきた。そして、不吉な影がすぐさま首座の上に射しはじめた。

ほんの一月前に醍醐寺で開かれた盛大な花見の宴の余韻は洛中にも城内にも残っていた。その日のために境内では庭園が設えられ、ここかしこと造築された。また、まわりの山には何百本という桜が植えられた。

そこに秀頼はもとより北の政所・淀君の正室側室をはじめ、諸大名とその家族ら千数百名が招かれ、料理に酒肴に茶事にとこれ以上ない贅を尽くした饗宴であった。

この春爛漫を謳歌した一日もやがて寂しく暮れようとしていたときであった。昔から律儀者と秀吉から可愛がられ、きょうも唯一人大名で陪席を許された

加賀大納言前田利家が感に堪えぬようにしみじみと秀吉に語りかけた。

「殿下。まさに歡樂極まりて哀情多し、とはこのことでございますな」

「うむ、」秀吉は頷いた。

いささか漢籍に自信がある利家がさらに「少壯幾時ぞ」とつづけようとする
と、耳元で「殿っ」というまつの厳しく制する声が聞こえた。はっとして利家は
飲み込んだ。瞬間、思わぬ緊張が走ったが、秀吉は聞くでもなく、茫洋と暮れゆ
く春の名残を惜しんでいた。

この話はその場に居合わせた女どもの口からすぐ大名諸侯の間に広まった。
危うく太閤の機嫌を損じかねないところをまつ様の機転で救われたという噂
が流れた。これを伝え聞いた内府徳川家康はふんと鼻先を鳴らした。「利家のさ
かしらめ。槍でも振り回しておればよいものを。何の、あの猿めに唐の古詩など
わかるものか」

漢の武帝が開いた壮大至極の宴にくらべればこんな花見はおよそ比ではなか
ったであろう。が、「少壯幾時ぞ、老いをいかんせん」と死の影に心安んずるこ
となない王座の怯えに唐本朝のちがいはなかった。

今宵の宴はその醍醐寺での花見の慰勞であった。警護や接待、また案内などに
まわった諸侯の労をねぎらったのである。しかし、もはや心はここになかった。

つぎの天下人は駿河大納言から内大臣までに登り詰めた徳川様。この隠忍

自重居士は表に恭順をよそおいながら、虎視眈々と秀吉の寿命が尽きるのをいまかいまかと狙っている。

そのことを誰よりも秀吉は知っていた。いくら誓書を書かせ、血判を押させ、泣いて秀頼のことを頼んでも、この男が約束を守るとは思えぬのだ。かつての自分が信長の死後、三歳の孫三法師をたてて織田家から実権を奪い盗ったように。果たしてその時、秀頼は一大名としてでも生かしておいてくれようか。

そんな猜疑と苦悶をはらすための日夜の宴であった。去年の秋、ちょっとした風労がもとでにわかには体力がぬけた。頭はさすがに衰えぬが、秀吉を驚かせたのはあの絶倫なる己が精力が消えたことだった。それはいぼり（小便）をまき散らすだけで、時にはしとねを濡らしてしまう有様だった。

「殿。今宵はここで」近侍が恐る恐る言上した。秀吉ははっとして夢から覚めたように、白々した一座を見まわした。早く退出したい思いをこらえかねている様子であった。

「うむ」とうなづいてから、急に気づいたようにいった。

「して、ちかごろ新左の姿が見えぬが、まだ煩ろうておるのか」

「はあ」と面を伏せた。

こんな時に、あれがおれば軽妙洒脱な軽口で座をにぎやかし、笑いのさざなみをおこしたであろうのに、と秀吉は思い、またその名を聞いて皆の者もすぐそ

う思った。

曾呂利新左衛門。秀吉のお伽衆としてその名を知らぬ者はおらぬが、しばらくびよう微恙にことよせてしゅっし出仕を見あわせていた。

「それにしても、ちと長うはないか」

「はあ、。それが」

「わるいか」「はあ」と面を深く伏せた。

秀吉はそうかと気の毒そうな顔を試みせたが、しゅんじ瞬時にやりとしたのを面をあげた近侍はみのが見逃さなかった。

「今宵はこれまでじゃ」

秀吉はこしょう小姓にかか抱えられて、しんでん寢殿に向かいながら、近いうちにあの新左めを見舞うてやろうと思いついた。

2

新左衛門は伏見の屋敷で床に伏せっていた。うつらうつらとまどろみ、まどろんではうすめ薄目をあけてしょうじ障子をしばらくなが眺め、また目をとじて眠った。

去年の秋深い夜であった。かわや厠に出ようと障子を開けたとき、ひゅっと一刷毛ひとほけの風が首筋に吹きこんだ。思わず大きなくさめをしたとたん、あわつぶ粟粒が背中にかじりついた。戻ってしょけん書見をつづけようとしたが、おかん悪寒が止まずそのまま数日寝込んでしまった。

そのころから何やら急に浮き世が煩わしくなり、むなしい気分おそに襲われだして、何をするのも億劫おっくうになった。ちょうどかぜを引いたのを幸いと、病と称して出仕おこたを怠っていた。

以来、胸中に何やら得体えたいの知れぬ一点の黒い影が染みついた。それが日増しに大きくなり、とぐろをまくようにして胸の片隅かたすみに居ついた。

泉州せんしゅう堺さかいに杉本しんえもん甚右衛門きやしという鞘師さやしがいた。どんな刀でも甚右衛門が作った鞘にはそろりとおさまるので、そろりの鞘師としてその腕前は世間に知られた。古来こらい堺は刃物かじ、鍛冶が有名で、多くの刀鍛冶が住んで、武具づくりが盛んだった。

天正てんしょう十三年のことである。羽柴はしば秀吉が四国の豪族ちやうそがべ長曾我部氏を討つために、阿波あわ、讃岐さぬき、伊予いよの三方から八万の大軍を送り込んだ。秀吉自身も親征しんせいを呼号こごうして、堺まで出向たいじんき滞陣した。

当初は秀吉の来泉らいせんで町はにぎわったが、所詮しよせん商人と武人は水と油。やれ屋敷を貸せ、蔵を開けよと、迷惑めいわくせんぼん千万。長居ながいする客ほど商人から嫌がられる者はいない。そんなとき、白木の板に黒々と墨書ぼくしょされた立て札が立った。

太閤しこくが 四石の米を 買ひかねて

きょうも五斗ごどかひ あすも五斗かひ

いっこうに四国とかいに渡海きやうかせぬ秀吉をからかった狂歌だった。

堺の町奉行は探索して、甚右衛門を捕らえた。というより、他に累が及ばぬようにと自ら名のり出たのである。さっそく秀吉の前に差し出された。

「その方、四石の米を買いかねたなどと、わしを愚弄したのはなぜじゃ」

「愚弄などと滅相もない。五斗買いには及びませぬ。はよう四国をお買いあげなされという町民どもの願いを詠んだだけでございます」

秀吉の欲している意中を見事に言い当てた。秀吉はこの頓才と心憎い追従に感心して、助命し家来に加えた。そのとき、生まれ変わったしるしに、姓名の儀を革めたいと申し出て許された。これが豊太閤第一のお伽衆曾呂利新左衛門誕生の由来である。

が、みな後に自身が言い広めたことである。鞆師で刀がそろりと収まらぬ鞆をつくる者など聞いたこともない。立て札に狂歌を書いたのも後知恵で考えたつくりごとである。

滞陣中のさる武將に鞆づくりを仰せつかったときに、御代のかわりに何とかお伽衆の端くれにでもと頼んだのである。その武將はあまりに見事な鞆に感じ入り、伽衆のひとりに熱心に口入れしてくれた。

まさにその口八丁手八丁で新左衛門はめきめき頭角をあらわし、秀吉の気にいられた。見え透いた追従や世辞に飽き飽きしているのを新左衛門はすぐ見抜いた。いっけん突拍子もないことを言って、秀吉を驚かせたり、怒らせたりしな

がら、最後は巧みに落ちをつけるのだった。そして、いまや天下無双といわれるほどの頓知頓才の伽衆であった。

顔が猿に似ているのを始終気にしている秀吉に「猿のほうが殿下に似ておるのでございます」とご機嫌を伺ったことや、御前で尻を放ってあやうく手打ちにされかかったとき、

世の中よ 尻こそなけれと 思ひ入る

山の奥にも 尻ぞ鳴くなる

と狂歌で返した、というたぐいでそのつど殿を喜ばせもしたが、もう思い出したくもなかった。

こんなこともあった。伏見城落成の間近の頃である。祝賀の宴もいよいよという矢先に、大門に落首があった。

「おごれる者はひさしからず、むかし清盛いま太閤。我が世誰ぞ常ならむ」とのうひつたいしよ能筆で大書してあった。聞いて秀吉は激怒した。さっそくひっ捕らえて打ち首にせよと厳命が下された。大工や職人・工人らを詮索して、あやしき浮浪人の人足らを二三名捕らえて責めてみたが、白状しなかった。しかし、秀吉はかまわぬから見せしめに、首をはねよと聞かない。「いましばらくの詮議を」と申し立てて、とてあずかたぶぎょうと捕り手預かり方のある奉行がそっと新左衛門に知恵を借りに来た。

かつてもしおきのあとに、番人や責め手、指図した奉行所の役人どもが頓死し

たり狂死したり、またその一族に凶事や変事が相次いだという。

「それもこれも、あの罪なき者への殺生が故ではないかと思う次第で。以来、何やらどうも寝覚めがよい。そこで、後生のためにも新左衛門殿になんぞよいお知恵はござらぬかと思うてな」

「なんの、造作ないことで」新左衛門はすぐに請け負うた。さっそく伺候して仕置きの件を持ち出すと秀吉の顔色がさっと変わった。

「しかし殿下。せつかくの落成の首途にお手打ちなど禍々しいことで。中国の故事にも古木を切ってさえ城中に凶事・災厄を招いた例がございます」

「何。ならばなんとする」

「落首には落首で返報してやるのです」

新左衛門は持参した巻紙をするすると広げた。

「おごれる者はひさしからず、おごらぬ者もまた然り。世の中は常ならむこそおもしろけれ」と見事な筆さばきで大書してあった。見て秀吉は喜んだ。おごろが、おごるまいが所詮は常なき世の一生一代。ならば天下におごりを極め尽くしてこそ天下人じゃ。

新左衛門はさっそくふたつの落首をならべて町に掲げさせた。町人どもはその機知を喜んで雑した。思えば、口舌の徒としていささか人助けに役立ったのはあのときぐらいのことであろうか。新左衛門は寂しく笑ってまた目をつぶった。

新左衛門はまどろみながら、おのれの来し方行く末に思いをはせた。が、もう自分に行く末はない。あるのは来し方ばかりである。

あるとき、秀吉から出自を聞かれて応えたことがある。

「わたくしめは刀鍛冶の家に生まれましてな。親父殿はこのわたしをそれは熱心に仕込んでくれました。が、どうもあのぎらりとした刃のひかりが気味悪うてしかたなくなりました。あれで人の首を切ったり、心の臓を突いたりするのかと思うただけでもぞっといたします」

「うむ。わしも人斬りは嫌いじゃ」と秀吉は応じた。「それでそちは鞘師になったのじゃな」

「御意」新左衛門は答えた。

「しかし、殿」新左衛門はここが聞かせどころと声に力をこめた。

「どんな真剣も折紙がつかねば、何の価値もありません。剣と鞘とこの折紙がついてこそ、まぎれもない天下の名刀、名宝。堺ではこれがうるさく吟味されるのでございます」

「して、その折紙とは」秀吉は扇をぱちりとならすと、身を乗りだした。

「刃の銘柄の証立てでございます。何尺、何寸の寸法で、いつどこで誰が打ったかを記した折紙がなければ、二束三文の値打ちもございません。それこそ、

宝の持ち腐れ」

「三成を呼べ」といきなり秀吉は叫んだ。参上した石田治部少輔三成にむかって、こう言い放った。「よいか、これからは折紙のつかぬ刀は眞贋定かならぬというふれを出せ。新左、そちは堺へ行って目利きを呼べ。それから折紙の元締めには本阿弥を命ぜよ」

一振り、数百両という名刀・宝剣は諸大名家にいくらでもある。まして、武士の命と心得る武将どもにとって、どれほど高値もつけても文句は出まい。その一二割を折紙の料としただけでも、莫大な実入りである。秀吉はすぐさま算盤を弾いた。

新左衛門の目論見は当たった。秀吉は武辺話や戯れ言だけで、高い扶持を払って伽衆を召すような男ではない。かならず相応の実利・実益の見返りを求めているのである。

秀吉が新左衛門を重宝がるのは、その抜群の商才と全国に放ってある乱波・素っ波などの及びもつかぬ諜報を得てくることであった。秀吉はこれはという有力大名に新左衛門を差し向けた。

ときにはどこそこの御大名の妻女・息女のそれはお美しいことと言上して、秀吉の好色をそそることも忘れなかった。

秀吉が諸大名のなかで一番腹の底が知りたい男は誰よりも徳川家康であった。

あんな^{りんしよく}吝嗇では家来も心底からは^{しんじゆう}臣従しまいと噂し、諸侯は軽んじていた。が、秀吉と新左衛門は信じなかった。

「徳川殿、どうじゃ、この新左衛門を一度^{よとぎ}夜伽に^{つか}遣わしましょうかな」と宴の席で言うと、家康はたいそう喜んだ。伺候してご機嫌を伺うと、家康はどんな話しにも興味を示し、また、頓知^{とんちばなし}噺や笑話に^{たいこぼら}太鼓腹をかかえてころころと笑いもした。好奇心^{おうせい}旺盛で、まことに^{くったく}屈託のない人物に映った。

そこで「ここだけの話しでござりますが」と^{ないみつ}内密めかして家康に誘いをかける。

「殿下の刀狩りは有名でござりますが、もうひとつの狩りもお好きでしてな」

「ほう、それはなんじゃ」

「はあ。女房狩りでございまして。御家来衆は皆次ぎは自分の妻女が狙われるのではと、いくさ以上に^{せんせんきょうきょう}戦々競々としておる有様で」

「ははは。それはそれはお盛んなことで、うらやましいかぎりじゃ」とすきを見せない。

「徳川様は、^{みかわ}三河代々の名家・名門の出でござりますゆえ、殿は一目も二目も置いて^{ごそんすう}常々御尊崇されております」とくすぐってみせると、

「なんの、なんの。豊臣家こそ元は^{せいわけんじ}清和源氏のお^{ちすじ}血筋とのこと。くらべて徳川など^{あしもと}足下にも及ばぬ^{いなかざむらい}三河の田舎侍じゃ」と乗ってこない。秀吉は先祖を源氏などと^{せんしょう}僭称しているが、その^{げせん}実下賤な百姓の出であることをよく知っているの

ある。

「して、どうじゃった」秀吉は待ちかねたように参上した新左衛門に尋ねた。

「いやはや、それがなんとも腹の読めぬ御仁で」とめずらしく歎いた。

「うむ。そうか。尻尾を出さぬか」

「はあ。古狸にしては」

ふたりは声をあげて笑った。しかし、それはいずれ自分たちを脅かすであろう得体の知れぬものへの空笑いにすぎなかった。

秀吉はますます家康への警戒を深めた。

来し方の追憶にふけりながら、それはいつもあるひとの面影に行き着くのであった。新左衛門はそのひとをしみじみと懐かしんだ。

4

新左衛門は生前一度だけ、大広間の饗宴の末席につらなってそのひとを見たことがあった。居並ぶ諸大名に伍して、黒づくめの衣を着た大柄の茶頭が殿下のお側に仕えていた。そこには何やらあたりを払う威風があって、諸侯をも圧するような落ち着きぶりであった。

あれがうわさに聞く大宗匠利休千宗易殿であったか。感嘆を禁じ得ぬ思いで、何度か遠目で見やるうちに、ふと目があった。

そのとき、利休は殿下の耳元に何かをささやきかけた。すると、ふたりは自分

を見て笑ったように見えた。

瞬間、新左衛門は目の前が青黒くなって、頭がくらくらとした。人を笑わせても、おのれが笑われることは許せぬ。新左衛門は瞋恚^{しんい}で目がくらみそうになった。

「何をこの、茶坊主め」新左衛門は歯ぎしりするように心のなかで呻^{うめ}いた。人前でこれほどの恥をかかせられたことはない。怒りと悔しさで、その後のことは何も覚えていなかった。

宴が終わり、殿下は皆が平伏するなかを近習^{きんじゅう}とともに退出した。その後を大名がつづき、やがて利休もゆっくりと立ち上がった。偉丈夫^{いじょうぶ}であった。

怒りに震えながらも面を伏せて、利休の過ぎるのを待っていると、ふと新左衛門の前で足をとめたのである。そして、さも懐かしげにこう語りかけてきた。

「新左衛門殿も、堺^での出じゃそうなのなあ」

「はっ」

「儂^{わし}ももとは堺^{ととや}の魚問屋のせがれじゃ。どうぞよしなにのう」

新左衛門はとっさに平伏するとしばらく面があげられなかった。瞬間、体じゅうが熱くなった。殿下へのささやきは新左衛門に同郷の誼^{よしみ}を感じてくれたからであろう。そのありがたさとうれしさがこみあげてきた。

しかし、このときほどおのれの卑^{いや}しさ恥ずかしさを思い知ったことはない。

かつて伽衆として殿下の側において、いま利休がしたように耳元に何事かをさ

さやいたことがある。すると、そのときたまたま陪席していた大名から翌日^{やま}山の
ような貢^{みつ}ぎ物が届けられた。不思議に思った新左衛門は、伺候の場で同じ事を繰
り返してみると、また翌日届けられるのであった。これに味をしめた新左衛門は
富裕^{ふゆう}な大名を狙って、じっと見つめてからそっとさきやくのであった。

新左衛門の蔵はたちまち米俵でいっぱいになった。中には菓子箱^{こばん}に小判^{しの}を忍
ばせるものまであった。太閤殿下に何やら陰口^{かげぐち}が吹きこまれたのではないかと
怖れてのことである。

新左衛門はこれを殿下の耳^{にお}の臭^かいを嗅ぐと称して、面白くてやめられなかつ
た。

「新左め、わしの耳を嗅いで蔵をたてよるは」と秀吉は笑った。

自分がやってきたことはいったい何であったか。ただ舌先三寸で権勢には限
りなく媚^こびへつらい、下の者どもは侮^{あなど}り見下してきたに過ぎない。

それにくらべて今は亡き利休居士のなんという心映^{こころば}えであったろうか。天下
人太閤殿下にお仕えする身でありながら、心は闊達^{かつたつ}自由^{あゆ}。阿諛も追従もなく、殿
下のお心にまっすぐに向き合ったのだ。

しかし、それが怒りにふれて、死^{たま}を賜うことになろうとは。御賢弟^{ごけんてい}大納言^{ひでなが}秀長
さまさえ生きておられたら、あのようなことには。関白^{ひでつぐ}秀次様へのむごい仕打ち
もまた。

新左衛門のなかに秀吉に対する暗い疑念がこみ上げてくる。天空^{かいかつ}海闊、
天衣無縫^{てんいむほう}で屈託のない人物として、盛んに持ち上げられてきたが、果たしてそう
か。その裏面は抜け目ない野心家として、いつも強欲と劣情、妬心^{としん}と驕慢^{きょうまん}がな
い交ぜ^まになってどす黒く渦を巻いていた。

それを明るく陽気に振る舞う閑白^{えん}を演じ、作り話を流しては親しみのある豊
太閣と庶民をたぶらかしてきたのだ。そして、それを一役どころか、二役も三役
も買って出たのがほかならぬこの自分である。

結局はその秀吉に終生^{しゅうせい}追従して、栄耀^{えいよう}に餅^{もち}の皮^{かわ}をむくような暮らしをしてき
たおのれの生涯^{せいがい}も忌まわしいものであった。何の、このわしが果報者^{かほうもの}であつたら
うか。

新左衛門はまた目をつむった。

5

深い眠りからようやく目が覚めようとしている。なんでも暗い井戸の底で、た
ゆとうているような心持ちであった。細目に何かがちらちらと見える。得体の知
れぬ者が上からじっと見下ろしている。よく見ると木の上にいる年老いた猿だ
った。胸を詰まらせるような厭^{いや}な面貌^{めんぼう}であった。

といきなり、その皺^{しわ}まみれの醜^{しゅう}悪^{あく}な顔が、真上からのぞき込んだ。

新左衛門はあっと叫んで目が覚めた。しばらく目を宙に浮かばせていたが、や

がて視線が相手に定まったとき、「これは」と言ってあわてて起きあがろうとした。

あろうことか、いつのまにか豊太閣秀吉が枕元にいたのだ。

「^{くる}苦しくない、そのまま、そのまま」

秀吉は^{おうよう}鷹揚に構えていた。

「^{ながわづら}ちと長患いじゃで、見舞うたのじゃ」

「^{かたじけ}殿下、忝ない。それがしの見舞いなど誠に恐れ多いことで」

「いや、いや。してどうじゃ、具合は」

「^{きじ}今度ばかりは、もう助からぬようで、医者も匙を投げておりまする」

「ふーん。それは気の毒なことよなあ」

「^{おんこ}殿下、長い間、ご恩顧を賜りましてありがとうございます存じました。^{こんじょう}今生の^{いとまご}暇乞いに御礼申し上げることができましたことが、せめても^{なぐさ}慰めでございます」

「そうか、いよいよか」

秀吉は^{たんそく}嘆息してみせたが、「して、新左」といきなり身を乗りだした。

「^{こころも}死ぬるときの心持ちとはどんなものじゃ」

新左衛門は目をつぶった。

「どうじゃ、新左。^{ここんむそう}古今無双の頓知の名人と言われたそちじゃ。死に^{のぞ}臨んでありきたりな^{じせい}辞世の句など詠んでもつまらんぞ。なんぞ気の利いた文句のひとつ

も出ぬものか」

この男は見舞いにきたのではない。わしの死をひやかしにきたのだ。新左衛門はかっと目を開いた。

「殿、人は、、、」

「さて、人は」

「人は死にとうはございませぬな」

「なんじゃ、それだけか」

「殿もまた、死にとうはございますまい」

「うむ。わしも死にとうはない。たしかに死にとうはないな」

秀吉は死が自分でないことにこみあげるような喜びを感じた。

その心底^{しんてい}を見極めた新左衛門はここを一期^{いちご}と覚悟を決めた。

「それにしても、殿のいくさ上手は天下一でござりましたな」

秀吉はおのがいくさの功名だけは何万言の褒^ほめ言葉が費やされても聞き飽きるということはなかった。せめてこやつ^{まつご}の末期の世辞でも聞いてやろうと思った。

「殿は兵糧攻^{ひょうろうせ}めが得意でございましたな」

「そうじゃ、わしは人をやたらと斬ったり突いたりする血生臭^{ちなまぐさ}い合戦が嫌いで
のう」

「なんの、なんの。あれはあれでむごいいくさではござりませぬでしたか。三木
の干殺し、鳥取の飢え殺しと世間で言われておる兵糧攻め。わずかな食糧を親同
胞で血眼で奪い合い、聞くも恐ろしき餓鬼地獄の噂に震え上がったことでござ
います」

「それは三木の領主がはよう降伏せなんだからじゃ。おのれの意地やら面子や
らで、家来ばかりでなく領民まで犠牲にしおったわ。が、鳥取城主吉川経家はお
のれの切腹と引き替えに郎党士卒の助命を申し出たので、聞き入れてやったの
じゃ」

「いや、いや。兵糧攻めで降伏した兵士にはうす粥を食わせるのが常でありま
すのに、生煮えの強飯を与えたとか。あまりの空腹にまかせてその飯を喰らった
兵どもはたちまち腹を抱えて悶絶し、せっかく生き残った兵の半分ちかくが死
んだとのこと。後にある武将があれは殿の御指図であったと申されておりましたよ」

「知らぬ」

秀吉はだんだんと不快が募ってくるのを、末期の戯言と我慢した。

「殿。殿は死にとうない、死にとうないとおっしゃるが、同じく死にとうない
人をぎょうさんに殺めましたな」

「それもこれも、天下取りのいくさのためじゃったのじゃ」

「そうばかりではありますまい。あの本能寺の凶変を伝えるために足輕の飛脚が陣中に参ったことがござりましたな。菅笠の緒に隠した密書を読むと、殿はその飛脚を厠に連れこんで物も言わずに刺し殺されました。雨にうたれ土にまみれながら、日に夜を継いで走り通したこの飛脚に一杯の白湯さえ与えず、いきなり刺し殺して、しかも厠に投げ込んだ。糞尿にまみれた遺骸を始末した御家来衆は何の事情か知らぬが、あまりにむごい殺され方に哀れを感じぬ者はいなかったといまも語り草になっておりますぞ」

秀吉はとうの昔に忘れ去った記憶が瞬間に蘇った。それは毛利攻めのとき、備中高松で城主清水宗治と媾和談判している最中のことであった。密書を読んだ瞬間、小柄に手をかけたが、それをぐっと抑えて、厠に連れて行ったのだ。

「新左、お前などには武将の心得などわかろうはずもない」

「そうでございましょうか」

「あまりに無慈悲と言いたいのが、そやつの死で媾和もでき、城主宗治の切腹だけで済んだのじゃ。小の虫を殺して、大の虫を生かす。いくさの世じゃ、仕方あるまいて。なにより天下太平のためじゃ」

「では、新左。今際の際に臨んで申し上げるが」

新左衛門はふとんを飛ばして跳ね起きた。

「あの利休居士の賜死や関白秀次様の御切腹も天下太平のためと仰せでしょ

うか。四^し条^{じょう}河^が原^{わら}でのあの御^ご妻^{さい}妾^{しょう}や幼^む君^{ぎん}たちの無^む惨^{ざん}な最^{さい}期^ごもまた」

「黙^げれ、下^ろ郎^う。この死^しに損^そないめ！」

秀吉は真^まっ青^きになって、思^おわず腰^{こし}に手^てをかけたが、無^む刀^{とう}であった。

「いえ、黙^もりませぬ。何^{なに}の罪^{つみ}とがもない朝^あ鮮^{せん}国^{こく}の民^た草^{みくさ}は耳^{みみ}や鼻^{はな}を削^そがれて、」

「えーい。黙^だらぬか」

秀吉はいきなり新^あ左^さ衛^ゑ門^{もん}の胸^{むね}ぐらをつかむと、喉^{のど}元^{もと}をしめあげた。新^あ左^さ衛^ゑ門^{もん}も秀吉にしがみついた。ふたりの顔^{かほ}が触^ふれあわんばかりになったとき、苦^く悶^{もん}の表^へ情^{じょう}を浮^もかべている新^あ左^さ衛^ゑ門^{もん}の口^{くち}からふっーと太^もい息^{いき}が漏^もれ出^でた。

「うっ」とまともにその息^{いき}を浴^あびた秀吉は思^おわず手^てを離^{はな}して、鼻^{はな}をおおった。

その何^{なに}という生^{なま}臭^{ぐさ}さ。まさ^まに死^し臭^{じゅう}であった。

「誰^{たれ}か」秀吉はふらふらと立^たち上^あがった。

次^ひぎの間^まで控^{ひか}える近^{ちか}侍^{ざむらい}が駆^りけ寄^より、両^{りょう}脇^{わき}を抱^{かか}えられて廊^{ろう}下^かに出^でた。

新^あ左^さ衛^ゑ門^{もん}は死^しんだようにそのま^ま倒^{たお}れ伏^ふしていた。

その日^ひから昏^{こん}々と新^あ左^さ衛^ゑ門^{もん}は眠^ねった。もはやこのま^ま助^{すけ}からぬであろうと皆^{みな}が覚^さ悟^ごしたとき、果^はたして新^あ左^さ衛^ゑ門^{もん}は朝^あのま^まぶしい光^{ひかり}のなかでそ^そと目^めを開^{ひら}けた。息^{いき}をふきかえたのである。

それから不^ふ思^し議^ぎなこ^ことが起^おこった。一^{いち}日^{にち}一^{いち}日^{にち}、薄^う皮^{すかわ}をむくように病^{びょう}が怠^たって

った。「あのとき、わしの体に長年^{おり}澱のように溜^たまっておった毒気がぬけたのじゃ。あまりに臭い耳を^か嗅ぎすぎたからのう」

不思議は伏見城内でも起こった。あの目をさかいに太閤秀吉は一気に病^やみついた。「御咳痰^{せきたん}やまず」と記録にある。

伝え聞いた家康は小^こ躍りした。急いで病床に参じた家康は、面に悲痛の色を浮かべながら、そのあまりの衰^{すい}弱^{じやく}ぶりをこの目で確かめてこれはいよいよと腹のなかで笑いをかみ殺した。

「猿め。あの息の臭いが消えぬのじゃ、あやつの口から吐き出^した死神^{しがみ}の息がわしの身に入ったのじゃ、と訳のわからぬうわごとを言っておったわ」と側近にうれしげに語った。

寝ついた秀吉は夜を嫌った。少し眠るとすぐ咳^せき込んで目が覚めた。このことを何より怖れた。うつろな目を開けて天^{てん}井^{じょう}をながめて過ごした。

ふと枕元で茶を点^たてている黒い茶頭^{ちやく}の影が見える。大きな手がぬっと出て、あの不吉な黒茶^{くろ}椀^{ちやくわん}が差し出される。口を近づけ飲もうとすると、あの臭いが鼻を打った。はっとして影に目をやると、死んだ利休がじっとこちらを見つめている。あっと言っ^て茶椀を落とすと、真っ赤な血が一面に流れ出した。

流れ出た血の先に、脇^{わき}差^さしを胸に刺されたあの飛脚^{ひやく}が血まみれでうずくまっている。

天下人豊太閤豊臣秀吉はこうして毎夜悪夢に襲われつづけて、狂い死にした。

秀吉の死後、新左衛門は泉州堺に帰った。もう武将や大名に抱えられる伽衆はやめにして、同じ口舌でも町人衆やお百姓を喜ばせる一口噺ひとくちばなしや頓知遊とんちあそびびを披露して余生よせいを過ごした。

このとき、平林平太夫へいだゆうという者が新左衛門の弟子となって師に劣らぬ才気さいき、かんぼつ換発かみがたの話芸を磨いたという。上方におけるはなしか噺家びその鼻祖びそといわれた安楽庵あんらくあんきくでん策伝さくでんの俗名こうかんと巷間こうかん伝えられている。